２０２５／１１／０９　　礼拝メッセージ　　大江郷子　牧師

主　　題：救いの本質と目的―補足と適用⑤―
聖書箇所：Ｉテサロニケ１章９－１０節

Ｉテサロニケ１：９－１０

「:9 私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、:10 また、神が死者の中からよみがえらせなさった御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになったか、それらのことは他の人々が言い広めているのです。」

Ｉテサロニケ１：９－１０を学んでいますけれども、きょうは１０節をともに学びましょう。きょうで終わりです。先々週は私たちは偶像から神に立ち返ったことを学びましたね。皆さんとともに学ぶ中にあって、多くの方はクリスチャンですので、皆さんに向けて偶像とは何かについて創世記の３章で学びました。実際にテサロニケの町は非常に偶像が盛んな町でしたから、テサロニケの教会は偶像礼拝から神に立ち返ったのですよね。神のみが神であることについて学びました。そして、先週は「**生けるまことの神に仕えるようになり**」、この「**仕える**」とは奴隷として仕えることが意味としてあることを学びましたね。ドゥーロスが使われていると。ですから彼らは偶像から神に立ち返っただけでなく、生けるまことの神に仕えるようになった。神の所有とされた。私たちもそうですよね。神の所有とされた、神のものとなった、主イエスの血によって私たちは買い取られて、神のものとなった。だからこそ私たちは神のものとして仕えるのです。この二つがテサロニケのクリスチャンたちが、非常に言い広められて、彼らがあかしをして神の栄光を現していった姿です。

そして、きょうは三つ目に彼らはクリスチャンとして、どのように歩んで人々にあかしをしていったかです。私たちはクリスチャンとしてどのように歩むべきかをテサロニケの教会から学ぶことができます。それはイエスを待ち望むことです。

☆私たちに与えられた二つの希望

１０節に「**また、神が死者の中からよみがえらせなさった御子**」とあります。一つ目の希望は、主イエス・キリストがよみがえった御子であるということです。つまり、私たちの信じているイエス・キリストは、十字架にかかって死んで終わりではなかったですよね。よみがえって、今確かに生きておられるということです。家族を亡くした方が「彼は死んでしまったけれども、今、私の心の中で生き続けているのです」と、よく言われるしょう。気持ちはよくわかりますけれども、私たちが希望を抱いている主イエス・キリストは、私の心の中でただ単に生き続けているだけのキリストではないのです。実際によみがえって、今も生きておられる神です。生きておられるまことの神が、私たちとともにおられるということです。それが私たちの一つ目の希望です。

二つ目の希望は、そのイエスが再び来られるということです。「**やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになった**」、この１０節を見ると、私たちは御子が天から来られるのを待ち望んでいるのだと。では、御子とはどのような方かと言うと、死からよみがえられた方であり、私たちを「**御怒りから救い出してくださるイエス**」だとあります。この二つがポイントです。

そして、よみがえられて今も生きておられるイエス・キリスト、そしてやがて私たちを迎えに来てくださるイエス・キリスト、この二つが私たちにとっては希望です。きょうどうしてこの話をするかというと、ぜひ皆さんに、きょう帰られてからこの１週間を過ごされる時に、毎日、毎日の中にあって、今も生きておられるイエス・キリストとやがて来られるイエス・キリストを覚えて歩んでほしいということで

す。ぜひそのようにチャレンジされるようにと思って、この 1 週間祈りつつメッセージの準備をしてまいりました。では早速見ていきましょう。

１．イエスの復活

一つ目にイエスの復活ということです。どうしてこのように多くのみことばを挙げたかというと、イエスの復活やよみがえることについていろいろと学んでいたら、ある時ふと、弟子たちはどうだったのだろう、弟子たちが主イエス・キリストが十字架にかかって、よみがえられた時にどうだったのだろうと思って、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書を比べながら読んでいたのです。弟子たちが主イエス・キリストが十字架にかかった時、聞いていたのに、主イエス・キリストがよみがえられたことをなかなか信じなかったのです。そして、イエス・キリストがよみがえられたことを確かに彼らが知った時に、このように変わっていったことを知ることができて非常に教えられました。ですからきょうはみことばを見ながら、イエス・キリストがよみがえられた時の弟子たちの姿を通して、私たちもイエス・キリストのよみがえり、生きておられるイエス・キリストを信じ、常に覚えておくことがどれだけ私たちの信仰を支えるかということについて、いっしょに見ていきたいと思います。

１）私たちに信仰の確証を与える

まず、弟子たちがそのようであったように、イエス・キリストが復活するのを知っていることによって、私たちは信仰の確証を得るのです。マルコ１６：１０「**……嘆き悲しんで泣いて……**」いた、ヨハネ２０：１９「**……ユダヤ人を恐れて戸がしめてあった……**」と書いてありますけれども、イエス・キリストが十字架にかかって死なれた時に、彼らが取っていた態度はこれだったのです。大の男が嘆き悲しんで泣いていたのです。「**ユダヤ人を恐れて戸がしめて**」隠れていたのです。覚えておかなければいけないことは、イエス・キリストは弟子たちにきちんと十字架とよみがえりを語っていたのです。マタイ１６：２１にこのように書いています。「**その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。**」と。マタイ１６章ですから、主イエス・キリストの公生涯の後半かもしれないけれども、イエス・キリストは弟子たちに十字架にかかって死んで３日目によみがえるということを明確に教えていたのです。

しかし、彼らは理解していなかった。ヨハネ２０：９に「**彼らは、イエスが死人の中からよみがえらなければならないという聖書を、まだ理解していなかったのである。**」とあります。これはヨハネの２０章で、どのようなシーンかと言うと、女性たちがイエスの墓が空であることを見つけて、知らせに来るのです。それで、ペテロとヨハネがブワーッと走って行って、空の墓を見て彼らは驚くのです。イエス・キリストは十字架にかかって３日後によみがえると教えられていたのに、彼らは驚くのです。「どうして墓が空なのだ」、「だれが主のからだを持って行ったのだ」と。ちんぷんかんぷんでしょう。これはヨハネの福音書ですから、あの時走って行ったヨハネが、「**彼らは、イエスが死人の中からよみがえらなければならないという聖書を、まだ理解していなかった……**」と、その時理解していなかったことを告白しているのです。

女性たちも墓に行った時に空だったので、「だれが主のからだを持って行ったのでしょう」、「主はどこに行ったのでしょう」と泣いたのです。ルカ２４：６に書いています。天使たちがふたり、女性のそばに立って言うのです。「**:6 ここにはおられません。よみがえられたのです。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出しなさい。:7 人の子は必ず罪人らの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえらなければならない、と言われたでしょう。**」と。イエス様は「**必ず罪人らの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえらなければならない**」と言われていたのです。そこで初めて女性たちは、天使の声を聞いて「ああそうだった」と、イエスのみことばを思い出したのです。

ルカの福音書２４章に続けてこのように書いています。エマオの途上はご存じですよね。エルサレムから近くのエマオへ向かって、弟子たちふたりが歩いていたのです。そのうちのひとりはクレオパとい

う弟子でした。彼らが歩いている時に復活され、栄光のからだを持った主イエス・キリストが後ろから近づいて来たのです。そして弟子たちふたりは主イエス・キリストの十字架について話していたのです。イエス様が「何の話しをしているのですか」と言った時に、「エルサレムにいた時のイエス・キリストの話ですよ、あなたは知らないのですか」と言って話をしているのです。その時にイエス・キリストがおっしゃったことが、ルカ２４：２５に書かれています。「**するとイエスは言われた。「ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。**」と。イエス・キリストは嘆きながら、ルカ２４：２７に「**それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。**」と記されています。詩篇１６篇でダビデが預言していたでしょう、わたしが必ずよみがえると。イザヤ書に書いてあるでしょう、わたしが十字架にかかると教えていたでしょうと。イエス・キリストはそれをもう一回彼らに教えたのです。彼らはそれを聞いた時に、霊が燃えてきたのです。心が燃えてきた、ああそうだった、イエス様そうだったと。旧約からずっと神様が預言されていたのだと。そして、夕方になった時に、「いっしょに泊まりませんか」とイエス・キリストを引き止めるのです。その時までまだ弟子たちは、主イエスだと思っていなかったのです。わからなかったのです。ルカに「**ふたりの目はさえぎられていて**」と書いていますからね。彼らといっしょに食卓について、パンを裂いて、彼らにそのパンを渡された時に、初めて彼らの目が開かれ、イエスだとわかった。

女性たちもあれだけ話を聞いていたのに、空の墓を見てイエス様はよみがえられたと思わなかったのです。ペテロとヨハネも思わなかった。そしてエマオの途上にあったクレオパたちもわからなかったのです。１１人の弟子たちはどうだったでしょう。彼らもイエス・キリストがよみがえられた、女性たちが「私たち、イエス・キリストと会った」と言っても、クレオパたちが証言しても、ペテロとヨハネが確かに墓は空だったと言っても、彼らはイエス・キリストがよみがえったということと結びついていなかったのです。ですから弟子たちがいた部屋に、イエス・キリストが入って来られた時に、彼らは驚いたのです。どうして驚いたと思いますか？イエス・キリストを幽霊だと思ったのです。ルカ２４：３７に「**彼らは驚き恐れて、霊を見ているのだと思った。**」と書かれています。イエス様はきちんと教えていたのです。しかもイエス様を見た人がいるのですよ、それなのに彼らは「**霊を見ていると思って驚いた**」と。しかし、イエス様は優しいですよね。「よく見なさい、手足を見なさいと、骨も肉もあるでしょう」と。「食べ物ありますか」とイエス様が言われて、弟子たちが焼いた魚を一切れ持って来たら、イエス様は弟子たちの前でそれを召し上がったのです。この記事を読むといつも自分の邪悪さを責められるのです。どうしてかと言うと、イエス様の立場になって考えてみてください。祭司長たちに十字架にかけられて、私は３日後によみがえりますとずっと教えていたのです。十字架で非常な苦しみを受けて、よみがえって、弟子たちに会ったら、彼らは自分のことを幽霊だと思ったのです。皆さんならどう思いますか？大阪弁で言うと「何、泣いてんねん、何隠れとんねん、よみがえるってずっと教えてたでしょう、希望を持って、なんであなたたち、待ってないの？」と。しかし、イエス様はそのようなことは言わないで、「食べ物を持って来なさい」と言って、「ほら食べられるでしょうと、栄光のからだだけれども肉も骨もあるでしょう」と。栄光のからだだけれども、イエス・キリストの手も足にも釘の跡があるのです。脇腹にも槍の跡があるのです。彼らが見て、主イエスだとわかる姿だったのです。「ほら生きているでしょう、わたしはよみがえったのだ」とイエス・キリストが教えてくださるのです。

しかし、まだ信じない人がひとりいました。トマスです。ヨハネ２０：２５に「**それで、ほかの弟子たちが彼に「私たちは主を見た」と言った。しかし、トマスは彼らに「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません」と言った。**」と記されています。頑固ですよね。しかし、これも自分自身、責められるところがあります。それから８日後にイエス・キリストがトマスの前に現れたのです。８日の間に、トマスを除いた十人の弟子たちがイエス

様に会ったのです。目の前でイエス様は魚を食べてくださったと言っているのです。クレオパがエマオの途上でイエス様がいっしょに歩いてくださって、旧約からずっとイエス様ご自身のことをあかししてくださったのです。パンを裂いて、最後の晩餐のように渡してくださったと。女性たちが私もイエス様と会った、墓が空だったと言っているのに、トマスは一週間以上ずっと信じなかったのです。ヨハネ２０：２６に「**:26 八日後に、弟子たちはまた室内におり、トマスも彼らといっしょにいた。戸が閉じられていたが、イエスが来て、彼らの中に立って「平安があなたがたにあるように」と言われた。:27 それからトマスに言われた。「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」:28 トマスは答えてイエスに言った。「私の主。私の神。」**」と書かれています。イエス様は優しいですよね。小さい時にこの箇所を読んだ時、トマスは完全にばれていると、私は思いました。自分が信じていないのもばれているし、「指を差し込まないと信じません」と言っていることも、イエス様にわかっているのですよね。イエス様がパッと現れた時に、「指に傷があるでしょう、手に足に傷あるでしょう？差し入れる？」と言われたのです。どうして信じないのだろう、弟子たちみながあかししているのに、どうして彼らの声に耳を傾けないのだと、イエス様は責められないで、「**信じない者にならないで、信じる者になりなさい。**」と言われた。その時にトマスはどのような反応をしたのかと言うと、「イエス様は確かによみがえったのですね、事実ですね、イエス・キリストがよみがえったのは、ハレルヤ」とはならなかったのです。生きているイエス・キリストを見た時に、トマスは何と言ったのか――。「**私の主。私の神。**」と、イエス・キリストを神として礼拝したのです。先週、私たちは神の奴隷だと学んだでしょう。神の奴隷がいるなら主人がいると。ですからたった一言ですが、「**私の主**」、「**私の神**」とあかしすることは、主イエス・キリストは私の主人だとあかしすることです。私は主イエス・キリストのものです、私は主のものです、私は主に従いますとあかしすることです。完全に主イエス・キリストを自分の神として礼拝しているのです。トマスは、よみがえりの事実だけを見たのではなく、よみがえりの事実を通して主イエス・キリストは生けるまことの神だということを見たのです。そして、礼拝したのです。

イエス・キリストは実際によみがえって、生けるまことの神だと彼らが理解した時、彼らは劇的な変化を遂げます。弟子たちは復活の事実だけでなく、そのことを通してイエス・キリストに生けるまことの神を見たのです。そして、彼らは生けるまことの神様に対する信仰を持ったのです。復活の信仰に対して生きたのです。彼らは復活の信仰を語ったのです。使徒の働き２章で、ペンテコステ、五旬節に、彼らが聖霊に満たされた時に、人々は彼らが酔っ払っていると思ったのです。その時にペテロは立ち上がって人々にあかしをします。ペテロは詩篇１６、ダビデのイエス・キリストの復活の預言があるので、それを通してイエス・キリストのよみがえりをあかししたのです。使徒の働き２：３１－３２に「**:31 それで後のことを予見して、キリストの復活について、『彼はハデスに捨てて置かれず、その肉からだは朽ち果てない』と語ったのです。: ３２神はこのイエスをよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です。**」と書かれています。人々は、詩篇１６はダビデのことを話しているのではないのですかと。いやいやダビデは預言者だから自分のことではなくて、イエス・キリストのことを預言しているのです。なぜなら実際にダビデは死んだでしょう、エルサレムの南にダビデの墓はあるではないですか。あなたはダビデの墓に行けば、ダビデが死んだことが見えるでしょう。それでは、ダビデは何を預言したのかと言うと、彼は主イエス・キリストのよみがえりを預言したのです。

そして、実際に主イエス・キリストは預言どおりによみがえられました。私たちはその証人なのです。私が語っていることは、主のよみがえりなのです。十字架だけではない、十字架による罪の贖いだけではない、主のよみがえりです。キリストの敵であった者たち、祭司長たちは、それを聞いた時に非常にまずいと思ったでしょうね。イエス・キリストの十字架だけならば、何とかなるでしょう。「ああそう、イエス・キリストが十字架にかかって、あなたの罪を背負って死なれたと信じているのですね」と。ところが

イエス・キリストは宣言されたとおりによみがえったのです。いまだかつて死んでよみがえることを自分で宣言して、よみがえった方はイエス・キリスト以外にひとりもいないのです。ラザロのように、イエス・キリストによみがえらされた者はいます。しかし、彼らはやがて死んでいきますよね。けれどもイエス・キリストだけが「わたしは死んでよみがえる」と宣言して、実際に死んでよみがえった。それはイエスを否定したい者からしたら、非常にまずいことです。

使徒の働き４：１－３にこのように書いています。「**:1 彼らが民に話していると、祭司たち、宮の守衛長、またサドカイ人たちがやって来たが、:2 この人たちは、ペテロとヨハネが民を教え、イエスのことを例にあげて死者の復活を宣べ伝えているのに、困り果て、:3 彼らに手をかけて捕らえた。そして翌日まで留置することにした。……**」と。サドカイ人はもともと死者の復活を信じていなかったです。けれども祭司たちは信じていました。しかし、イエス・キリストが死者から復活されたことに関しては、絶対認めたくなかった。彼らが一番つぶしたかったのは、主のよみがえりのメッセージです。なぜならそれが私たちの核だとわかっていたからです。ところがこのように捕えられ**て、**お灸をすえられても、使徒たちはいっこうにめげることなく、どんどんどんどん主がよみがえられたことを語っていきます。使徒の働き４：３３に「**使徒たちは、主イエスの復活を非常に力強くあかしし、大きな恵みがそのすべての者の上にあった。**」と書かれています。非常に力強く彼らはあかししていったのです。黙れと言われたのに黙らなかったどころか、力強くあかしし始めました。この「**非常に**」というのは、メガということばのもとになったことばです。巨大な銀行、メガバンクのメガのもとになったことばです。ギリシャ語で“デュナミス”と言うのですが、「**力強く**」はダイナマイトのもとになったことばです。口止めされているのに、彼らがどれだけパワフルによみがえりを語り始めたかわかるでしょう。ですから彼らの上に大きな恵みがありました。神はそれを祝されたのです。

彼らは捕えられて祭司長の前に、議会に連れて来られて「あれほど厳しく命じたのに、どうしてあなたたちは語っているのですか」と問い詰められた時に、このように答えています。使徒の働き５：２９－３３に「**:29 ペテロをはじめ使徒たちは答えて言った。「人に従うより、神に従うべきです。:30 私たちの父祖たちの神は、あなたがたが十字架にかけて殺したイエスを、よみがえらせたのです。:31 そして神は、イスラエルに悔い改めと罪の赦しを与えるために、このイエスを君とし、救い主として、ご自分の右に上げられました。:32 私たちはそのことの証人です。神がご自分に従う者たちにお与えになった聖霊もそのことの証人です。」:33 彼らはこれを聞いて怒り狂い、使徒たちを殺そうと計った。**」と書かれています。ところがこのよみがえりのメッセージはどんどん広がっていきます。使徒の働き６：７に「**こうして神のことばは、ますます広まって行き、エルサレムで、弟子の数が非常にふえて行った。そして、多くの祭司たちが次々に信仰に入った。**」と記されています。イエス・キリストは神を汚す者だと言っていた多くの祭司たちが次々に信仰に入っていった。

しかし、彼らへの迫害は止まりません。そのよみがえりのメッセージに多くの者が殉教していきます。有名なのがステパノです。彼はあかしをした後に、人々によって殺されていきます。使徒の働き７：５４－５８に「**:54 人々はこれを聞いて、はらわたが煮え返る思いで、ステパノに向かって歯ぎしりした。:55 しかし、聖霊に満たされていたステパノは、天を見つめ、神の栄光と、神の右に立っておられるイエスとを見て、:56 こう言った。「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます。」:57 人々は大声で叫びながら、耳をおおい、いっせいにステパノに殺到した。:58 そして彼を町の外に追い出して、石で打ち殺した。証人たちは、自分たちの着物をサウロという青年の足もとに置いた。**」と書かれています。このサウロというのは後のパウロです。パウロはステパノを殺すことに同意していました。彼はよみがえりを語っているクリスチャンたちを迫害してきました。しかし、彼もよみがえった生けるまことの神、主イエス・キリストと会うことによって、主に対する信仰を持っていきます。そして彼もクリスチャンとなって、いのちをかけて主のよみがえりを語り始めるのです。

パウロが伝道したテサロニケの教会ができ始めた頃のことがこのように書かれています。使徒の働き１７：１－３に「**:1 彼らはアムピポリスとアポロニヤを通って、テサロニケへ行った。そこには、ユダヤ人の会堂があった。:2 パウロはいつもしているように、会堂に入って行って、三つの安息日にわたり、**（３週にわたって）**聖書に基づいて彼らと論じた。:3 そして、キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならないことを説明し、また論証して、「私があなたがたに伝えているこのイエスこそ、キリストなのです」と言った。**」とあります。このイエスこそ油を注がれた生けるまことの王であり、主であることのあかしをしていったのです。どうしてこれだけ長く時間を使って話してきたかと言うと、ほかの新約聖書を見てもそうですが、私たちが覚えていないといけないことは、よみがえりと再臨です。神様がよみがえられたこのすごい業と、イエス・キリストを思って生きているだけではなくて、今、実際にイエス・キリストは生きておられて、私たちのうちにも外にもおられ、私たちとともにおられ、一つになっていることを私たちが覚えることは、私たちの信仰にとってとても大切なことです。もちろん十字架は大切です、十字架によって私たちの罪はあがなわれたのです。しかし、その信仰の確証はどこから来たのでしょうか？それは、主イエス・キリストがよみがえられたことによって私たちに信仰の確証が与えられたのです。

Ｉコリント１５：１４にこのように書いています。「**そして、キリストが復活されなかったのなら、私たちの宣教は実質のないものになり、あなたがたの信仰も実質のないものになるのです。**」と。Ｉコリント１５：１７－１９に「**:17 そして、もしキリストがよみがえらなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです。:18 そうだったら、キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまったのです。:19 もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。**」と記されています。いのちをかけて彼らはよみがえりを語ったのです。「**もしキリストがよみがえらなかったのなら、単なる希望を置いているだけなら、……一番哀れ**」だと言っているのです。私たちは神の所有とされた時に、私たちのすべては神のものだと思ったわけです。実際に、弟子たちは自分のいのちまで捨てて、主イエス・キリストのよみがえりを宣べ伝えていったのです。なぜかと言うと、そこに私たちの希望があることを弟子たちは実際に見て、わかっていたからです。

２）私たちが主と共にあることの確証を与える

２番目に、主が今も生きておられることは私たちにどのような関係があるでしょうか？それは私たちが主とともにあることの確証を与えるということです。Ｉテサロニケ５：１０に「**主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが、目ざめていても、眠っていても、主とともに生きるためです。**」とあります。死んでくださったのは私たちがどのような時でも主とともに生きるためです。もちろんこの中にはよみがえりが入っています。主イエス・キリストの十字架は、私たちが主イエス・キリストとともに十字架にかかったのだから、主イエス・キリストと私たちを一つにします。そして、主イエス・キリストがよみがえられたことによって、私たちは主とともに生きることになるのです。その確証を私たちに与えるのです。

ローマ６：８－９に「**:8 もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。:9 キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはなく、死はもはやキリストを支配しないことを、私たちは知っています。**」と記されています。よみがえられた主イエス・キリストはもう死なないのです。ですから私たちは主とともに歩む者となったのです。主と一つにされたのです。私たちはもう主と永遠に引き離されることはないと。主イエス・キリストはよみがえられ、生きておられて、私たちとともにおられるのです。ではそのことは私たちとどのような関わりがあるのでしょうか？主イエス・キリストがよみがえられて、生きておられる主イエス・キリストが私たちとともにおられることは、今私たちが歩んでいく中にあって、どうして毎日覚えておかなければならないのでしょうか？それは生けるまことの神と私たちがともに歩んでいることは、私たちを変えることになるからです。私たちはキリストに似た者へと変えられていくのです。私たちはキリストが歩んだように、正しい、聖い歩みをなしてい

くためのチャレンジを神様は常に与えてくださる。生きておられる聖い神様が私たちのうちにおられるからです。

ローマ６：１０－１１にこのように書かれています。「**:10 なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです。:11 このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。**」と。私たちはキリストとともによみがえらされた者として、罪から解放されて義に生きる者、神の栄光を現す者へと変えられていくのです。Ｉコリント６：１９－２０にこのように書いています。「**:19 あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。:20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい。**」と。あなたは実際にキリストのいのちによって代価を払って買い取られ、キリストのものとなった。すこし神学的なことを言えば、主イエス・キリストは私たちのうちにおられますけれども、主イエス・キリストは聖霊なる神様を通して私たちのうちにおられます。どうしてそのように言えるかと言うと、ローマ８：９に「**……キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。**」と書かれています。Ｉヨハネ４章には、父なる神様が聖霊なる神様を通して、私たちのうちに住まれると書いてあります。そして私たちはそれによって、神の所有とされ、それゆえに私たちのうちに神の臨在があるのです。

ここで「**聖霊の宮**」とあります。この「**宮**」ということばは、神殿を表す時にいろいろなことばがありますが、ところがこの「**聖霊の宮**」と書かれている時のことばはどこを指しているかと言うと、至聖所を表します。至聖所は神殿の中のずっと奥に聖所があるのです。聖所と至聖所の間に分厚い垂れ幕がかかっていて、その垂れ幕の奥に至聖所があるのです。契約の箱がある。至聖所は神の臨在されるところだから、普通の祭司は入れなくて、大祭司しか入れないのです。しかも大祭司もいつも入れるわけではないのです。年に１回しか入れないのです。それぐらい聖い所なのです。その手前の聖所が聖くないと言っているのではないのです。手前の聖所も神が特別に切り分けた所ですから、聖い所です。例えばレビ１０：２に「**すると、【主】の前から火が出て、彼らを焼き尽くし、彼らは【主】の前で死んだ。**」と書かれています。これは何かというと、最初の大祭司だったアロンの子どもたちにナダブとアビフという者がいましたが、彼らは異なった火を神にささげたのです。神が定めた火と違う火をささげようとした。香を焚いて聖所に持って行ったその瞬間に、彼らふたりは神によって焼き殺されたのです。ですから聖所も、とても聖い所です。彼らが殺された時にアロンたちに言われたのです。レビ１０：６に「**……あなたがたは髪の毛を乱してはならない。また着物を引き裂いてはならない。あなたがたが死なないため、また怒りが全会衆に下らないためである。……**」と書いています。神を侮ったがゆえに、彼らは殺されたのです。それを悲しむな、髪の毛を振り乱すなと言われたのです。

しかし、そこよりもさらに分厚い垂れ幕で区切られて、普通の祭司では入れない、大祭司しか入れないところが至聖所――神が臨在される所です。しかもその大祭司も年に 1 回しか入れない。それが私たちだと言うのです。これがどれだけすごいかと言うと、神殿はいくつかのエリアに分かれていたのです。神殿は聖所と至聖所を真ん中にしてずっと大きかったのです。一番外側は異邦人の庭だったのです。イスラエル以外の民は信仰を持っていたとしても、生けるまことの神を信じていたとしても、そこまでしか入れなかったのです。その次はもうすこし内側に婦人の庭というのがありました。信仰を持っていても女や子どもは神の臨在がある至聖所に近づくことはできなかったのです。その内側にイスラエルの庭というのがあったのです。それは男性のみが入れる所です。しかし、その男性のみが入れる所も信仰を持っていたとしても一般の人たちはそこまでです。そこからさらに内側の聖所の横に祭司の庭というのがあるのです。神によって選ばれて、神に任命された祭司だけが入れるところです。ところが神に任命された祭司たちも至聖所には入れなかった。さらにその中から選ばれた大祭司が年に一回だけ、会衆のために

そして自分と自分の家族のためにいけにえをささげて、自分のからだを水で清めて、特別な装束を着て、香を焚き、ヤギの血を携えて、年に一度だけ入れる神の臨在されるところが至聖所だったのです。私たち異邦人はそこからずっと遠く離れていたのです。

ところが、主イエス・キリストが十字架にかかられ、贖いが全うされたことによって、私たちは至聖所だというのです。私たちのうちに神が臨在される、私たちは神とともに生きていて、神と一つだと言うのです。それならば私たちが歩むべき道は決まっていますよね。聖い神が私たちのうちにおられるなら、私たちはおのずと自分が正しく、聖い歩みをしていきたい、キリストに似た者へと変えられていきたいと願っていくでしょう。ですから私たちはこのことを常に覚えておかなければいけないのです。

３）キリストが再び来られる事の確証を与える

三つ目は、イエス・キリストが再び来られるということも確証されています。Ｉテサロニケ４：１４に「**私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずです。**」と記されています。イエス・キリストが復活したのなら、イエス・キリストは必ず来られるということです。ですから復活は、　その確証を与えるのです。Ｉテサロニケ１：１０に「**また、神が死者の中からよみがえらせなさった御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになった……**」と書いています。「**天から来られる**」イエスとはどのような方でしょうか？私たちとイエス・キリストは一つなのでしょう。私たちはいつもイエスとともにいるのです。それなのにイエス様が天から来られるとはどういうことですか。そのイエス様はどういうイエス様ですか。なぜならもういっしょにいるのでしょう？どうしてイエス様は迎えに来ないといけないのですか？イエス・キリストが十字架にかかられた時に、私たちはどうなりましたか？イエス・キリストは十字架の上で肉体において死なれました。その時私たちは、霊的にイエス・キリストの十字架の上で死にました。私たちの古い性質が、イエス・キリストとともに十字架にかけられて、イエス・キリストは肉体において死なれたけれども、私たちは霊において古い性質がそこで死んだのです。イエス・キリストは肉体においてよみがえられました。その時私たちは霊的に新しい者へ変えられました。イエス・キリストとともに霊的に私たちはよみがえらされたのです。

そして、よみがえったイエス・キリストは栄光のからだを持たれました。福音書を見ても、栄光のからだとは不思議でしょう。骨と肉があるのです。ですからイエス・キリストは肉体を持っていたのです。「霊ではないでしょう」と言いながら、戸締りがしっかりしている所にすっと入って来られたのです。不思議ですよね。そこまでしか私たちはわからないですけれども、復活された時に、イエス・キリストは栄光のからだという肉体を持たれたのです。イエス・キリストの復活された肉体は今どこにありますか？イエス様は亡くなってないですよね、生きておられるでしょう。イエス・キリストは、手足に釘の跡があり、脇腹に槍の跡がある栄光のからだを持って、今、神の右の座におられるわけでしょう？ですからその傷を持って、神の右におられて、私たちをとりなしてくださっているのです。私たちもイエス・キリストとともに神の右の座に座っているのです。私たちの肉体は今、ここにあるけれども、霊においてキリストと一つにされたがゆえに、栄光のからだに変えられたイエス・キリストは神の右の座におられるけれども、一つとされた私たちの肉体はここにあっても、霊において神の右の座にいるのです。イエス・キリストの肉体は天にあるのです。しかし、今イエス様は霊において私たちといっしょに住まわれ、私たちと一つにされているのです。

それならばイエス・キリストが再び来られる時には、私たちは今霊だからイエス・キリストを見ることはできないでしょう。私たちの心のうちにおられるけれどもイエス・キリストを見ることはできないではないですか。神様は偏在だけれども、そこにおられると言っても、私たちは見ることができないでしょう。しかし、やがて私たちの目で見えるかたちで、栄光のからだを帯びた、手と足にくぎの跡があるイエス・キリストが来られるということです。私たちは直接イエス・キリストと相まみえることができる。そ

れがイエス・キリストの再臨の私たちの希望です。今は見ていないけれども、私たちはやがて見ることができるのです。

２．イエスの再臨

イエス・キリストの再臨のことが使徒の働き１：３で優しく丁寧に説明されています。「**イエスは苦しみを受けた後、四十日の間、彼らに現れて、神の国のことを語り、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。**」と。イエス様は優しいですね。四十日間、弟子たちといっしょにおられました。すこしいいなと思ったりもしますけれども、栄光のからだを持っているイエス様が四十日、いっしょにおられたのです。イエス様がいろいろなことを教えてくださって、イエス様は確かによみがえって、生きておられることを彼らは確信を持っていったのです。

そして、使徒の働き１：４－５に「**:4 彼らといっしょにいるとき、イエスは彼らにこう命じられた。「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。:5 ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。**」。そして、１：８－１１に「**:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。**」**:9 こう言ってから、イエスは彼らが見ている間に上げられ、雲に包まれて、見えなくなられた。:10 イエスが上って行かれるとき、弟子たちは天を見つめていた。すると、見よ、白い衣を着た人がふたり、彼らのそばに立っていた。:11 そして、こう言った。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。**」と記されています。肉体を持っていた弟子たちは、栄光のからだに変えられたイエス様を見ることも、話しすることもでき、四十日いっしょにいたのです。そして、イエス・キリストは弟子たちの前で見えるかたちで天に登っていかれたのです。それと同じ有様で、主イエス・キリストは戻って来られる、私たちが見えるかたちでイエス・キリストは必ず戻って来られる。どうしてその確証を言えるのですか？イエス・キリストは復活して、今も生きておられるからです。

イエス・キリストは再び戻って来られますけれども、Ｉテサロニケ１：１０に戻っていただくと「**……すなわち、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち……**」とあります。それではイエス・キリストは何のために私たちに見えるかたちで戻って来られるのでしょうか？それは私たちを「**御怒り**」から救い出してくださるためです。だれの「**御怒り**」でしょうか、神です。神の「**御怒り**」から私たちを救い出してくださるために、主イエス・キリストが再び来られるのです。ローマ２：５に「**ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現れる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。**」と書いています。このローマ２：５の「**御怒り**」と先ほどのＩテサロニケ１：１０にある「**御怒り**」は、同じことばが使われています。そして、「**御怒り**」から私たちを救うためにキリストは来られるのです。「**御怒り**」は、私たち人間が怒る時に出すような怒りではないです。私たちは、怒る時にバーンと感情を爆発させますでしょう。自制心をなくして、イライラして、髪の毛を振り乱してみたいに。しかし、神の「**御怒り**」は、きわめて冷静で、抑圧された怒りであることがこのことばからわかります。このもともとのことばの意味は、大きな波が膨れ上がり、うねる様を表す時に使われます。皆さんは東北の津波を覚えておられるでしょう。海面がぐわーっと盛り上がって来て、静かに、しかしものすごいエネルギーを蓄えて、ざーっと近寄って来る。神の怒りとはそのようなものだと言うのです。ヘブル１０：３１にこのようにあります。「**生ける神の手の中に陥ることは恐ろしいことです。**」と。ヘブル９：２８はまた読んでおいてください。主が私たちを救うために来られたことのもう一つの証拠です。そのような「**御怒り**」から私たちを救い出してくださるために、イエス・キリストは来られるのです。このＩテサロニケ１：１０の「**やがて来る御怒りから私たちを救い出す**」の「**救い出す**」というのは「解放する」という意味があります。私たちをその「**御怒り**」から解放するために、主イエス・キリストは来られるのです。

それでは主は、どのようにして私たちを「**御怒り**」から救い出してくださるのでしょうか？それは、私たちをこの地上から取り上げることによって救い出してくださるのです。Ｉテサロニケ４：１６－１７に「**:16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、:17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。**」と記されています。「**引き上げられ**」ということばは、非常に暴力的なことばが使われています。どういう意味かと言うと、力づくで、力任せに引き上げるという意味です。地上にいる主イエスを主と仰ぐ私たちを、主イエス・キリストは来られて、神の「**御怒り**」から救い出すために、私たちを取り上げてくださる。そうして私たちは空中で栄光のからだを帯びた主と会うことになります。それでは地上に残された者はだれですか？神の「**御怒り**」を受ける者たちです。主を主と信じない者、神を神と思わない者たちが残されて、そこから神のさばきが始まっていきます。

それでは空中で引き上げられた私たちはどうなるのでしょうか？救われていない者だけが残されて、救われた私たちは引き上げられるのです。その時私たちはどうなるのでしょうか？私たちもイエス・キリストと同じように栄光のからだに変えられます。ピリピ３：２０－２１に「**:20 けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。:21 キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。**」と記されています。私たちは主イエスと同じような栄光のからだに変えられます。そして、その後どこに行くのでしょうか？引き上げられて、空中でイエス・キリストと会い、栄光のからだに変えられた私たちは天に行きます。

ヨハネ１４：２－３にこのように書かれています。「**:2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。:3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。**」と。この「**迎えます**」というのは、主が再び来られる時のことを指します。天に私たちを連れて行くためにです。弟子たちは見たけれども、私たちはよみがえったイエスを見ていない。ですから私たちはイエス・キリストが再び来られることに関しても、私たちにはある意味確証はないですよね。それではどうして私たちはイエス・キリストが今も生きておられるまことの神であることを覚えて、イエス・キリストが再び来られることを確信を持っていくのでしょうか？それは神が私たちに与えてくださった救いである信仰によって、その確信を得ていくのです。Ｉペテロ１：８－９にこのように書いてあります。「**:8 あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。:9 これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです。**」と。私たちは救われた者として、信仰の結果として、たましいの救いを得た者として、私たちは見ていないけれども、今生きているイエス・キリストに希望を置き、見ていないけれども、生きているイエス・キリストが傷を帯びた栄光のからだを持って、私たちを迎えに来てくださることに希望を置いて日々歩んでいくのです。ローマ８：２３－２５に「**:23 それればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にしていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。:24 私たちは、この望みによって救われているのです。目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。:25 もしまだ見ていないものを望んでいるのなら、私たちは、忍耐をもって熱心に待ちます。**」とあります。聖書っておもしろいですよね。人は違うでしょう。目で見ているものに確信を持ち、希望を置くでしょう。みことばは違うのです。目に見えないからこそ希望を置き、そこに信頼するのです。信仰を持っていくのです。もう見えるものはいいではないですか、どうしてさらに望むのですか。イエス・キリストが今も生きてお

られることを信じて確信を持ちなさい、イエス・キリストが必ず迎えに来られることを、忍耐や希望を持って待ち望みなさいと。

Ｉテサロニケ１：１０で書いている「**……イエスが天から来られるのを待ち望むようになったか、……**」この「**待ち望むようになった**」ということばは、三つの概念が含まれているのです。一つ目は忍耐という概念が入っています。そして二つ目は希望です。そして三つ目は継続です。忍耐と希望と継続は、「**待ち望む**」ということばの中にアイデアとして入っているということです。日本語訳に直訳すると、「私たちはイエス・キリストを見ていないけれども、イエス・キリストが今生きておられることも、見てないけれどもイエス・キリストがやがて来られることも、私たちは希望を持って、忍耐強く、待ち続けるのです」。このように私たちが、イエス・キリストが再び来られることの希望を持っているならば、私たちどのように変わっていくでしょうか。あの聖い神が私たちのうちにおられ、私たちがキリストと一つにされるということは、私たちが神に喜ばれるキリストに似た者へと変えられていきたいという強い願いを持って生き、その動機付けをするように、やがて生けるまことの神の主イエス・キリストと会うことは、十字架の傷を負ったイエス・キリストと私たちが会うということは、私たちの普段の生活の中にあって、神の前に正しく、聖く歩みたいという願いを私たちに常にチャレンジして与え続けるということです。イエス・キリストと会うのですから。「あなたはその時どこにいたのですか、私が迎えに来た時、あなたはどこにいたのですか、そこで何をしていたのですか、どのような感情を持っていたのですか、何を思っていたのですか、人に対してどのような態度を取っていたのですか」と。私たちはいつ主が迎えに来られてもいいように、私たちは神の前に正しい態度で歩みたいと願い続けるものです。

Ｉヨハネ３：２－３にこのように書いてあります。「**……しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。:3 キリストに対するこの望みをいだく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。**」と。主イエス・キリストが十字架にかかられた時に、聖所と至聖所を分ける分厚い、重い垂れ幕は上から下まで真っ二つに裂けました。マタイ２７：５１にこのように書かれています。「**すると、見よ。神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。そして、地が揺れ動き、岩が裂けた。**」と。あれは主イエス・キリストの十字架での贖いが完成されたしるしです。選ばれた祭司の中でもさらに選ばれた大祭司が、会衆のためにも、自分や自分の家族のためにもいけにえをささげて、聖所の前で水を浴びて、自ら自分のからだを清めて、香を焚き、ヤギの血を携えて、一年３６５日の間たった１日１回しか入ることができなかった至聖所の幕を真っ二つに分けて、私たちが神の至聖所になったと言うのです。私たちの心のうちに神の臨在があるのです。私たちは神とともにいるのです。私たちは神と一つにされたのです。それだけではなく、やがて栄光のからだを帯びた、私たちが目に見えるかたちで、あの手と足に十字架の傷を負われたイエス・キリストが、あの手と足に釘の跡を携えながら、脇に傷跡を持ちながらも、主イエス・キリストは目に見えるかたちで私たちを迎えに来られて、私たちは顔と顔を合わせて主イエス・キリストとお会いすることができるのです。私たちはその時から永遠に神から離されることはない。いつも栄光のからだを帯びた主イエス・キリストと永遠にともに過ごす。それを覚えている者は、キリストが歩まれたように、正しく聖い歩みをなしたいと願い続ける者なのです。

ですから私たちは、この二つの希望、よみがえられて今生きておられるイエス・キリストが、私たちのうちにおられ、私たちと一つにされているというよみがえられた主イエス・キリストの希望、そして二つ目にイエス・キリストがあの栄光のからだを帯びて、私たちを迎えに来てくださるという希望を私たちはいつも覚えて、主の前に正しく歩み続けることです。それは私たちがこの地上において、主の栄光を現す最も大切な希望です。